MAKE BEYOND *the Story*

フィールドを変えて実現できる夢がある。

生　産

田中 薫平　札幌支店 北海道BPJV工事事務所 職員 / 2020年入社

小学校から野球一筋。大学では建築を学びながらも野球は続けていたが、プロ野球の世界に入ることは考えておらず、建築業界への就職を目指して活動。建築業界に興味を持ったのは、大きな建物に携わる醍醐味を感じたこと。「この建物を建てた」と胸を張って言えるプロジェクトに憧れ、大林組ならばそれを実現できると感じ入社を決意。野球部の先輩もおり、職員同士の距離が近いと聞いていたこと、またインターンシップに参加した際に、職員のみなさんのいきいきとした楽しそうな雰囲気も決め手のひとつ。

Story 1

「大林組ではじまった、夢のつづき・・・」

途切れたはずの道が
思いもよらない形で繋がる

大林組が北海道にかつてない画期的なスタジアムを建設しようとしている。そんな話を耳にしたのは、内定後の懇親会でのことでした。北海道日本ハムファイターズの新球場である「エスコンフィールド HOKKAIDO」。35,000人収容の大規模な屋内型球場には、切妻型の開閉屋根や約9,900㎡の自立ガラス壁、360°コンコースなど、数々の斬新なアイデアが盛り込まれており、大林組はその設計から施工まで一貫して手がけているということでした。その話を聞いたとき、期待に胸が高鳴りました。「野球は学生時代まで」そう割り切っていたつもりでしたが、大林組という新しいチーム、新しい環境で球界に関わることができるかもしれないと思ったからです。振り返ればあのときに、一度諦めた夢の続きが始まったのかもしれません。

監督の言葉を指針に
新たなフィールドを模索する

「やるからにはプロフェッショナルを目指そう」。これは大学時代に何度も耳にした硬式野球部の監督の口ぐせです。厳しい練習の最中や、思うように結果が出ないとき、いつもこの言葉が私を励ましてくれました。就職活動においても、監督の言葉は大切な指針のひとつとして、つねに念頭にあったように思います。建築業界に進むなら、トップクラスを目指そう。誰もが知っているような存在感のある建物を造ろう。そう思って企業研究を進めていたところ、自然と大林組への関心が大きくなっていったのです。硬式野球部の先輩が大林組で働いていたことから、社員同士の距離が近いという話をよく聞いていました。何より、先輩の生き生きとした様子そのものが、仕事のやりがいを雄弁に物語っていたように思います。野球とは異なるフィールドですが、大林組でなら本物のプロフェッショナルになれるだろうと予感しました。

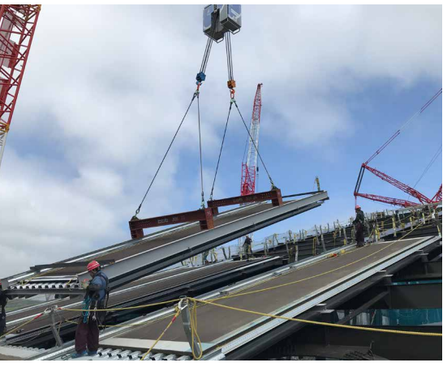
学生時代の私

硬式野球部に所属し、ひたすら野球にめり込んだ日々。そこには、重要な学びが詰まっていました。なかでも大学3年生のときに、はじめてAチームから脱落した経験は、貴重な糧になったと思います。自分のおごりに気づき、一からやり直す気持ちで、後輩にも積極的にアドバイスを求めました。その結果、早々にAチームに復帰することができたのです。見栄やプライドを捨てて、なすべきことをなす。それが結果を出すうえで必要な姿勢だと実感しました。

Story 2
「建設現場でヒットを打つことはできるのか」

選ばれた喜びも、つかの間 不安に飲み込まれる

北海道ボールパークFビレッジのコンセプトは「“北海道のシンボル”となる空間を創造する」こと。エンターテイメントやアクティビティの多彩な施設が揃うこのライブ・エンターテイメントタウンにおいて、大林組が手がけるスタジアムは中核を担います。街そのものを大きく変貌させるような巨大プロジェクトに、素人の新入社員が携わることができるのか。正直、見込みは薄いと思いながらも、メンバーに立候補しました。すると、熱意をくんでいただいたのか、大学時代の野球経験を考慮してくれたのか、なんとチームの一員に選んでいただいたのです。その結果はうれしいの一言に尽きます。かつての野球部員たちにも、望みが叶ったことを誇らしい気持ちで報告しました。ですが、いざ現場に入ると、不安がよろこびを塗りつぶしてしまいました。そこでは、大林組の職員約150人、職人さん1,000人以上が働いています。その中で、私よりも未熟な人はいないでしょう。そのことを意識すると、ひたすら心細さを感じました。



一筋縄ではいかないコンクリート発注 経験と計算をどう配合するか

私の担当は、コンクリート工事の品質管理でした。設計図を見ながら工程ごとの品質を確認するだけでなく、先手を打って次工程の発注もしなければいけません。このとき、事前に必要な分量を計算して発注するのですが、もし計算が間違っていて不足があろうものなら、急きょ追加発注することになります。そのために40分もの間、職人さんを待たせ、意味のない残業をさせてしまったこともあります。あのときの申し訳ない気持ちは、今でも忘れられません。しかし怯んでばかりもいられず、自らを奮い立たせて、積極的に職人さんとコミュニケーションを取ることを心がけました。すると、少しずつ状況が変わっていったのです。経験豊富な職人さんの直感は、自分の計算よりも正確であることが多く、何気ない雑談の中にヒントが散りばめられていることも珍しくありません。そうしたコメントを参照しながら、私の分量計算とすり合わせていくうちに、だんだん正しい分量の発注ができるようになっていったのです。職人さんから「やるじゃないか」と褒められたときには、野球でヒットを打つ瞬間と同じくらい、あるいはそれ以上の喜びが込み上げてきました。

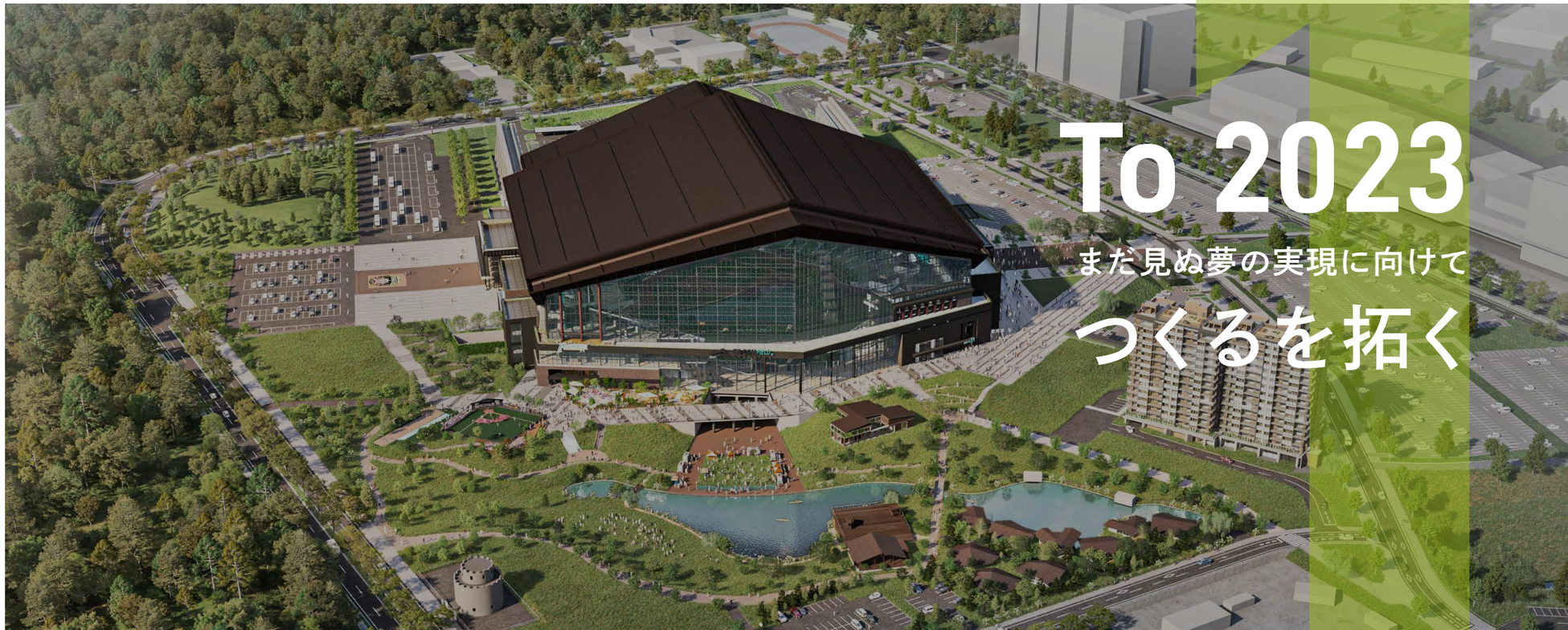
Story 3
「世界に誇る仕事をこれからも」

半年間、現場を離れることで信頼関係を実感

コンクリート工事を担当していたのは、入社初年の4月から10月末までの約半年。その後、生産設計研修のために北海道を離れ、東京へ行くことになりました。そのことを職人さんに告げたとき「田中くんがいなくなったら誰がコンクリートをやるんだ。きみしかいないだろ」と言っていただいたことが印象に残っています。普段はそんな素振りを見せず、厳しいご指摘もされる職人さんたちですが、半年の間に信頼関係を築けたことに感動しました。翌年の4月には研修を終えて再び北海道の現場に戻ることになるのですが、そのときも皆さんには変わることなく歓迎していただきました。その信頼と期待を実感するたびに、私ももてる力を尽くしてプロジェクトに貢献しなければいけないと身が引き締まります。今度の担当は、鉄骨工事。すでにプロジェクト開始から1年が過ぎ、広い現場では、さまざまな作業が同時に進んでいます。少し目を離しただけで、状況を把握できなくなる恐れが付きまとい、つねに四方八方に神経を張り巡らせる必要があります。もちろん先輩頼りの側面もありますが、だんだん現場全体を俯瞰できるようになり、工事の先が見通せるようになってきました。

将来は自分が主軸になってスタジアム建設に関わりたい

現在はボールパークのエントランス工事を担当しています。まさにボールパークの顔といえる部分ですから、自然と気合も入ります。このスタジアムは、大林組のこれまでの経験や豊富な知識、高い技術力を結集した世界に誇れる施設といって過言ではありません。それだけに、地元の人たちの期待の大きさも感じています。まずは安全第一に工事を進め、人々の期待に応えられるようなボールパークを完成させることが一番の目標です。そして、このプロジェクトからできる限りの知見を吸収し、経験を蓄えたいと思います。そのうえで、いつか新たなスタジアムの建設プロジェクトをメインで引っ張っていけるようなリーダーになりたいと考えています。



To 2023
まだ見ぬ夢の実現に向けて
つくるを拓く